

# 大田先生、ありがとう！

中島千恵

(京都文教短期大学)

私が初めて大田先生と出会ったのは、ごく普通に学会会場でした。ところが、なぜか鮮やかな記憶に残っているのは、学会終了後、二人で京都駅までタクシーに乗った時の光景です。彼女はすでに学会では有名人で、かっぷく、態度、双方とも堂々とし、おしゃべりをする表情は明るく、生き生きとしていました。おしゃれな上に、もともと色白だったこともあり、華やかで、美しく輝いて見えました。しかし、弱々しい女性ではありません。彼女には、周りの人々を威圧するような強さもありました。ひとつの学会を切り盛りし、まとめていくには、あの強さが必要だったのかもしれませんが。私は、自分を押し出していける大田先生のあの強さを時々うらやましく思っていました。

2009年の日英教育学会では、学会のお仕事を徐々に他の人に移していきながら、ご自分の研究の集大成になるような本をまとめようとしておられるという印象を受けていました。毎年なら、学会の通訳をした後、テープ起こしや翻訳を引き受けたりで、大田先生とのコミュニケーションが何度かありました。ところが、2009年の夏はとても忙しく、ちょっと気になりながらも、大田先生に自然なかたちで体調など伺う機会がないまま、突然の訃報が届いてしまいました。高野先生から「大田さんの体調がひどく悪いらしい、あなたには知らせておくね」というメールが最初に入り、数日後、「既に亡くなっておられたらしい、言葉もない」という知らせが続いたのです。ショックと悲しさと同時に、「大田さん、ひどいじゃないですか！」とつぶやかずにはいられない思いがこみ上げてきました。しかし、「ひどいじゃないですか」という言葉は、彼女の体調が良くないことを、夏の学会でわかっていたのに、忙しさにかまけ、積極的に彼女とコミュニケーションをとり、少しでも負担を軽減できるように動いていなかった自分を責める言葉でもありました。

しばらくは、電車の中でも大田先生のことを思い出すとすぐに涙が出てしまい、ふと気がつくと、もう彼女と一緒に通訳はできなくなったのだという現実を受け止めようともせず、あたかもまだ彼女が生きているようなふりをしている自分が居ました。「お別れの会」が開催された日には、既に以前から海外での学会発表を予定していたため、参加できなかったのですが、参加できないことを悲しいとも思いませんでした。むしろ、「大田さん、お別れなんかしていないで、私と一緒にアメリカに行こう！」と誘っていました。

上田先生から大田先生を偲ぶ文集を作成されることを聞いてから、ぜひ、書かせていただこう

と思いつながら、書こうとするとどうしても涙があふれ、ただ、「ありがとう！」という一言しか出てこないまま先送りにし、とうとう原稿締め切りが来てしまいました。何カ月もたっているのに、なぜ、こんなに涙が出てくるのか……。

私は、学会の中で、大田先生と特別親しかったわけではありません。大田先生は、誰とでも親しく接することができる人でした。現在、学会長の上田学先生のこと、*「がくちゃん」*と呼んで、学会の様々な人々とフランクな姿勢で関われる人でしたから、私にも「ちえさん」と親しみの感じられる呼び方をしてくれました。このような人との関わり方は彼女の人柄でもあり、才能であったかもしれません。

しかし、私が泣けるのは、そのような親しみのある関わり故ではありません。何年間か続けて彼女とペアを組んで通訳をしてきたからです。通訳することは、私の中学校時代からの夢とどこかつながっている部分があるのです。すばらしい英語の先生になりたい、国際的な仕事をしたい、この独特のリズムを持つ英語と関わる生き方をしたいという漠然とした思いの実現と深くつながっていたのです。ところが、学部時代にイギリスに留学（1年）、結婚してからアメリカに留学（2年半）、通算すると3年半、英語圏で勉強したにも拘わらず、帰国してから国際的な環境に身を置くことはできませんでした。もし、大田先生が日英教育学会で通訳する機会を与えてくれなければ、海外で培った能力を生かす機会も無いまま、ただむなしく英語力の衰えを受け入れなければならなかったでしょう。短大に就職してからは、日常的に英語を使う機会がそれまで以上に少なくなり、もう、十数年前にアメリカから帰国した直後の英語力はありません。通訳のスピードがなくなり、適切な単語が思い出せないことが増えてきました。ですから、日英教育学会で通訳の機会を得られたのは、私にはとてもありがたいことでした。私の人生の中でそのような時があったこと、私の昔からの思いとも関わって大事なことだったと感じます。

大田先生との通訳では、いつも驚かされました。彼女は、講演者のかなり長い話もポイントをしっかりと把握し、通訳できるのです。メモリー・スパンの短い私は、日本語でも長く話されると、細かな点がわからなくなってしまうものですから、どうしてあれほど長い話を簡単なメモだけで再現できるのか、不思議でもありました。わかったのは、彼女は事前に演者の著書や論文を読み、講演のテーマについてとても良く勉強していたということです。やはり彼女はすごい努力家だったのです。「やはり」というのは、彼女のキャリアと業績から彼女が勉強家であることは誰の目にも明白だからです。すばらしい通訳のためにも、彼女はしっかりと勉強していたのです。

しかしながら、涙がいつまでも止まらない理由の中核にはペアで行なった通訳の楽しさ、一緒に仕事をした素朴な楽しさがあるのだと思います。通訳を一緒にできたこと、私はそれが楽しかったのです。学会に貢献するとか、学問のためとか、もちろん大事なことでありますが、そういう大義名分ではなく、ペアを組んで、一緒に通訳をしたのが純粋に楽しかったのです。おもしろかったのです。学会での通訳では、「私とちえさんは最強のペアだからね」と言ってくれた大田先生。ありがとう！ ありがとう！ ありがとう！ 大田さん、やっぱり涙がとまらないよ。